しゃろーむ
学園だより No.40
■発行人・発行所／学校法人 北海道カトリック学園　理事長 勝谷　太治
札幌市中央区北1条東6丁目10カトリック札幌司教館内

天国と地獄

学校法人 北海道カトリック学園
理事長　勝谷　太治

前号で天国と地獄の話をしました。今回も天国と地獄についての説明をわかりやすいたとえで紹介したいと思います。

ある人が天国と地獄はどういうところなのか知りたいと切に神に祈り求めました。神は彼の願いに応え、夢の中に天使を使わされました。天使が最初に彼を連れて行ったところは地獄です。そこは彼が予想していたようなおどろおどろしい光景が広がるところではなく、きれいな部屋と食卓に、ごちそうが供されている光景でした。しかし、そこに座っている人たちはみな顔をゆがめて苦しんでいるのです。たった一つのルールが彼らを苦しめていました。それは自分の腕よりも長い箸を使って食べなければならないというものです。これには他の説明もあります。腕を曲げられないとか、日本人でなければ「箸」ではなく、腕より長い「フォークとスプーン」という設定になるでしょう。いずれにせよ、自分の口に食べ物を運ぶことができないということです。彼らはごちそうを目の前にしながらそれを食べることができずに苦しみもがいているのです。

次に連れていかれたところは天国です。天国も同じような食卓にごちそうが供され、地獄と全く同じルールがありました。しかし、そこにいる人たちはみな笑顔で食事を楽しんでいるのです。不思議に思ってよく見ると、人々は、自分で食べることはできませんが、人に与えることはできます。自分が食べたいものを人が与えてくれ、人が食べたいものを自分が与える、そのようにして皆が満足して食事を楽しんでいるのです。

地獄は自分が得をすることしか考えず、人に与えることをしらない人、完全なエゴイストたちの世界です。天国は、自分のために何も得ずとも、人のために与えることを知っている愛の交わりに生きる人たちの世界です。

天国と地獄は神が報いや罰として人に与えるものではなく、そこにいる人間自らが作り出す世界です。そして、それは今、この世界にいる私たちの生き方の延長にあるのです。世界を天国にするのか地獄にするのかはそこに生きる私たちの在り方、その選択にかかっているのです。

初めての遊園地

認定こども園虹の森カトリック幼稚園
保護者　佐野 紫央里

先日家族で遊園地に行った時の事。喜びにあふれ、怖がる事なく次々と乗り物に挑戦する姿に、頼もしさと成長を感じていました。

そんな時、「ママ、次はどれに乗りたい?次はママの好きなのでいいよ?パパとママとつむちゃんと、順番に好きなのに乗っていこう!」と娘の発言。『いつからこんなに大人に?!』驚きと共に、“皆で一緒に楽しもうね!”という他者への思いやりを感じ、温かい気持ちになりました。

さらにもう一つ感じた事。それは、この思いやりの気持ちはきっと、園のお友達や先生方が、いつも相手を思いやって声かけをしてくれているから。娘は園で皆からの優しさに包まれて過ごしているのだろうな、という事です。自分がしてもらって嬉しかった事を、パパやママにもしてあげたい!という気持ちなのかな?と想像し、とても嬉しい気持ちになりました。

そして、娘からの提案に夫の答えは・・・「パパはいいから、つむちゃんの好きなのでいいよ〜!」困ったように、でも嬉しくてはにかむ娘。私の答えは・・・「ありがとう!ママも好きなのいいの?うれしい!じゃあ、アレがいいな!さっそく行こう♪」満足げな顔で、張り切って次の乗り物へ向かう娘。

どんな顔の娘も微笑ましく、親である私達にも様々な新しい経験と喜びを与えてくれる娘にあらためて感謝した一日でした。

「こども基本法」の施行
―子どもの意見が尊重される社会へ

藤女子大学人間生活学部保育学科　教授　高橋 真由美

2023年4月に全ての子どもが幸せに成長できる社会の実現を目標とし、「こども家庭庁」が発足しました。「こども家庭庁」は子どもの視点に立った当事者目線の政策を強力に進めていくことを目指した政府の機関です。残念なことに、このような機関を発足する必要があるほど、日本の子ども達がおかれている現状には課題が多いということなのでしょう。では子どもが幸せに成長できる社会を構築していくために私達大人には何ができるでしょうか。

こども家庭庁の発足と同時に「こども基本法」が施行されました。「こども基本法」には、「すべてのこどもは大事に育てられ、生活が守られ、愛され、保護される権利が守られ、平等に教育を受けられること」「家庭や子育てに夢を持ち、喜びを感じられる社会をつくる」などの6つの基本理念が示されています。その中のひとつに、「すべてのこどもは年齢や発達の程度に応じて、意見が尊重され、こどもの今とこれからにとって最もよいことが優先して考えられること」という理念が挙げられています。

この理念で着目したいのは、「すべてのこどもは年齢や発達の程度に応じて意見が尊重される」という点です。「すべてのこども」には、乳幼児ももちろん含まれますが、「乳幼児」と「意見」は結びつけにくいかと思います。しかしながら「年齢と発達に応じた意見」となると、赤ちゃんが「興味をもったものに触りたい様子を見せること」、「泣いて何かを要求すること」や、幼児が「自分でやりたい」「これをやりたい」「これは嫌」などの気持ちを発信することも意見として捉えることができるのではないでしょうか。これらの発信は、時として大人が「こうして欲しい」と思うことと相反する場合もあります。その際、あまり考えずに大人の都合で「ダメ」「あとで」と対応することは、子ども達に「あなたの意見は尊重に値しない」というメッセージとなる危険性をはらんでいるのではないか…と思ったりもします。もちろん、やってはいけないことを「ダメ」と教えることは大人の大切な役割だと思います。ただ、その際には、なぜそのような主張をするのか察したり、子どもなりの理由に耳を傾けたりするなど、「ひと呼吸おく」ことも必要なのではないでしょうか。そのような積み重ねが、この社会は、子どもの意見や気持ちが尊重され、幸せに成長できる場所であることを子ども達に伝えることにつながるのではないかと思います。

教えて！チャプレン

幼稚園で「神様のお話」をしてくださるチャプレン（神父様）からのお話です。

カトリックの信仰、希望、愛

チャプレン　蓑島 克哉　神父

カトリック幼稚園は、愛と思いやりに根差したキリスト教の精神に基づき、子どもたちが自分自身や他の人々を尊重し、神さまとの関りの中で心身ともに成長することができるように努めています。

私は福岡県で神父の勉強をしていたとき、ある親子と出会いました。私と同年代のお父さんは娘が4歳のとき奥さんが病気で亡くなり、男手ひとつで娘さんを育てていました。クリスチャンであった奥さんは4歳の娘に料理の作り方を教えて天国へ旅立ちました。「生きることは食べること、あとは神様がなんとかしてくれる」そういう思いだったそうです。やがて、中学二年生になり思春期を迎えた娘さんですが、ある日お父さんが「お父さんはお母さんのように悩みを聞いてあげられなくてごめんね。」と言ったところ、「お父さん、なんば言いよっと。私はお母さんの娘だよ。心配せんでよか。それよりもお父さん、これからもちゃんと毎朝、私が作った味噌汁飲んでね」と答えたそうです。お父さんは目に涙を浮かべながら本当に嬉しそうに話していらっしゃいました。母が娘に示した“愛”と、神さまがなんとかしてくれるから大丈夫という“信仰”は、きっと娘さんの将来にとって大きな支えとなり、どんなときも“希望”のうちに歩んでいけることでしょう。

子どもたちが安心のうちに成長することができますよう祈りながら挨拶を終わります。

笑顔いっぱい とんぽみち

認定こども園さゆり幼稚園

心温まる時間

教諭　佐藤　ひなの

さゆり幼稚園では、週に1回聖堂訪問があります。昨年までのコロナ渦は、ホールで行っていたのですが、今年度から全園児で聖堂に集まり、神父様から神様のお話をしていただいています。ホールとは子どもたちの様子も違い、入堂してから心を落ち着かせ、心の中で神様とお話する時間を大切に、より神様を近くに感じているように思います。神父様のお話は小さいクラスの子どもたちでもわかりやすいように、イラストや人形を使って神様のお話をしてくださいます。母の日の前にはマリア様のお話と共に、お母さんに「ありがとう」や「ごめんなさい」がすぐに言えるといいね、とお話してくださいました。クラスでは、母の日のプレゼントを作っていたこともあり、どんな風にお母さんにプレゼント渡そうかと話しをしていると、子どもたちから「おいしいご飯ありがとう!」「お母さん大好き!」と次々と言葉が出てきました。神父様からのお話が子どもたちの心に届いていることを改めて実感しました。毎週神父様のお話を楽しみにしている子どもたち。これからも感謝の気持ちを大切に、きれいな心で過ごしていけるよう、子どもたちと関わっていきたいと思います。

認定こども園長沼カトリック聖心幼稚園

縦割り保育と横割り保育の日常

教諭　平田　絢子

新学期になり、始めは新しいクラスに緊張する子、学年が上がったことで自信を持つ子、そして園生活の全てが初めての新入園児、一人ひとりが個性あふれる様々な姿を見せていました。

5月に入った頃から、そんな子どもたちにも少しずつ変化が見られてきました。始めは自分で精一杯だった在園児が、新入園児に対し優しく声を掛けるようになってきました。「お世話するのって大変。」と笑顔で話しながら、年少児にご飯の準備を教える年長児の姿があり、教える大変さだけではなく、楽しさや喜びも感じているようでした。そして、年少児も教えてもらったことを覚え、身支度等を自分で頑張るようになり、優しい年長児に憧れを持ち一緒に遊びたがる姿も見られるようになりました。その様子を見ると、お互いを思いやり日々を過ごす気持ちが少しずつ芽生えているように感じます。

また、現在横割り年少児の活動の中では、運動会に向け列を乱さないよう意識をしながら歩く練習をしています。始めは保育者の声掛けも届かない程自由に歩く子どもたちでしたが「さっき○○くんと手を繋いで歩いたよ。」や「○○ちゃんの後ろに並ぶんだよね。」と自分で覚えたことを一生懸命保育者に教えようとする子どもたちの姿が見られました。横割り保育は始まったばかりなので、子どもたちの吸収力に驚かされると同時に、今後の子どもたちの成長がより一層楽しみになりました。

旭川藤幼稚園

大地の恵みの喜びを子どもたちと共に

副主任　喜多　香

三年以上続いたコロナ禍も落ち着き、行事の有り方も見直される年となりそうです。コロナが影響を及ぼした事は多々ありますが、自園ではその中でも細心の注意を払いながらも、細々と続けてきた行事があります。それが、秋の収穫祭です。

毎年春にはプランターや畑にラディッシュや芋、大根などの種蒔きをし、トマトやピーマン、ズッキーニなど数種類の苗を畑に植え、子ども達が水やりや草取りなどを手掛け、野菜の生育を見守ります。他にもスイカや苺もたわわに実を付け、みんなで分け合っていただきます。

秋には焚き火をし、大地の香りを噛み締めながら掘ったじゃが芋や畑で実った野菜をホイルで包み焼いて食べたり、枝の先にマシュマロを刺して自分で炙って食べるなど、美味しくも楽しい体験をします。普段、苦手な野菜がある子も、この時ばかりは笑顔で「おかわり!」とお皿を差し出すから不思議です。そんな子ども達の顔を見ながら“食べることは生きること”だと改めて食育の大切さを実感しています。

今年は初めてさつまいもとトウモロコシの作付けに挑戦し、収穫祭をより美味しく楽しい行事にしたいと思っています。又、夏には大根の葉を薬味に用いた流しそうめんの復活を願わずにはいられません。これからも、子ども達と一緒に“生きること”に向き合っていこうと思っています。

真駒内聖母幼稚園

お母さんと文通弁当

教諭　深田　結

自園では、現在、お母さんが作る愛情と栄養たっぷりの美味しいお弁当での「食育」を大切にしています。どんなおかずが入っているか、毎日楽しみにしている子どもたち。しかし、私の年長クラスにはなかなか食が進まない偏食のＧくんがいました。

Gくんは園バスを利用して通園しており、お母さんと直接話す機会が少なかったため、お弁当箱にお手紙を付けることにしました。手紙を通して様子を伝えていくうちに、少しずつ食べられるものが増え、楽しんで食事の時間を過ごすようになっていきました。そんなとき、お母さんから一通のお手紙をいただきました。「いつも丁寧に見てくださり、ありがとうございます!」そのお返事がとても嬉しくて、今でも私の宝物です。

卒園後、小学校で心配していた給食は、毎日喜んで食べているという話をお母さんから聞きました。お母さんとお弁当を通してやり取りをしていた日々を懐かしく感じ、Ｇくんの成長を一緒に喜ぶことが出来て、保育者という仕事をしていて心から良かったなと思う出来事でした。

これからも、子どもたちのために家庭と連携しながら、成長を傍で見守っていきたいと思います。